

## ■ミャンマー難民救援活動報告

日本青年会議所 国境なき奉仕団

難波 巧

ミャンマー（旧ビルマ）北部地域のタイ国境に接した所にカレン州があり、ここに約220万人のカレン族という少数民族が住んでいます。

彼らは1988年の軍事クーデターで政権を獲得したミャンマー軍事政権と対立し、現在もカレン族の独立を目指し、反政府政権のカレン民族同盟（KUN）として軍事政権打倒の活動を続づけています。しかし政府がタイ国業者への森林伐採権売却、タイとの国境貿易に直接乗り出して、彼らの主な収入源へ経済圧迫を加えるとともに組織への攻撃を強めています。こうした政府側の攻撃や迫害によりタイ領内へ避難するものが増え続けているのが現況です。

タイ北部の町メソト（MAESOD）に難民として流入し、山間部に16ヶ所の難民キャンプを形成し、現在の難民数約5万6千名に達し、今後も増加することが予想されています。学校も小学校が各キャンプに1ヶ所、全体のキャンプで中学校8校、高校3校があります。タイ政府が難民として認めていないため、農地の開拓、森林の伐採、タイ国内での労働も認められていない事や、国連などの公的援助が受けられないため、食糧や医療品等に関してはNGO団体の援助に頼っている状況です。

今回このタイ国内ミャンマー難民（カレン族）救援活動に（社）日本青会議所“国境なき奉仕団”の一員として5月上旬参加してきました。私は初めて救援活動参加でもあり、タイを訪れるのも初めてでした。期待と不安の入り交じる中バンコクの空港へ到着し40度近い暑さを想像していたのですが、なぜか曇り空。聞く所によると前日は20数年ぶりの大雨による大洪水にバンコク市内は見舞われたの事。現地の人に聞くと今年は異常気象で雨季のはしりが1ヵ月位早く来ているのではとの事、運がいいのか悪いのか複雑な気持ちでした。

私の隊のメンバーはその後メソトに着くまで飛行機トラブルにもたたられ、6時間のマイクロバスでの移動を強いられた目的地に着くまでも大変でした。

今回の救援活動は25名のメンバーが分散して、14のキャンプを訪問し、そして難民たちに米、トウガラシ、食用油、ノート、ボールペンなどの救援物資（約1千3百万円相当）を手渡すのが目的でした。日本からの本格的な人道的援助は今回初めてという事でさまざま面で不備な面が多かったようです。ある時は、トウガラシの粉にむせて涙が止らなかつたり、雨でびしょぬれになりながらのトラックの物資運搬や積み降ろし、そしてキャンプまでの山あり谷ありの徒歩移動にはほとんど疲れしました。場所によっては船で物資補給をした所もありました。

医療状況について触れますと、4キャンプをドイツの医療チーム、9キャンプをフランスの国境なき医師団、3キャンプをアメリカの医療チームが受け持って活動しているようです。南部の方の訪問できなかつた2キャンプでは半年に1度の食糧援助、医療援助しかできないらしいですが、その他のキャンプでは医療の方は1ヵ月に1度、食糧の方は3ヵ月に1度の援助があるそうです。

私は救援活動に参加してみて、あらためて日本の豊かさをしみじみ感じました。しかしそれは本当の意味での豊かさなのでしょうか。まだ十分使える電気器具や家具が捨てられたゴミの山、食べ残された多くの食糧、そしてそれをあたり前のことと感じる日本人。現地の子供たちはおもちゃもなく、お菓子ももちろんありませんが、決して暗さはなく、石と石をぶつけあったりして本当に楽しく遊んでいました。その輝くような笑顔が今もなお目の奥から離れません。



カレン難民キャンプでの難波氏